

最優秀賞

今までの自分

埼玉県立戸田翔陽高等学校 1年

山崎 佑太

僕たちは普段、日常の中でたくさんの人と関わりながら生きている。家族、友達、先生地域の人たちなど。しかし、振り返ってみると、自分の周りには「障害のある人」とのふれあいが、ほとんどなかったことに気がついた。もしかしたら同じ学校にいるかもしれない、同じ町に住んでいるかもしれない。だけど、「見えていなかった」のかもしれない。

中学校の授業で、地元の障害者支援施設からゲストが来てくださることになった。「共生社会について考えよう」という総合学習の時間で、施設の方と、そこを利用している人たちと一緒に交流するというものだった。僕は正直、不安だった。どう接すればいいのかわからない、変なことを言ってしまうか自分の言葉が相手を傷つけてしまわないか。そんなことばかり考えていた。当日、体育館で待っていると、支援施設のスタッフの方と、数名の利用者の方が到着した。笑顔で手を振ってくれる人、少し緊張した様子の人、車いすに乗っている人。最初の印象は「みんな、僕たちと変わらない」様子だった。笑顔もあるし、話しかけたら普通に返事が返ってくる。ただそれぞれに、話し方が少し違ったり、動きがゆっくりだったり、サポートが必要な部分があるだけだった。その日、グループに分かれて簡単なゲームをしたり、質問タイムでお互いのことを話し合ったりした。僕が担当になったのは、20代の男性で、知的障害があるという方だった。最初はぎこちなく、会話もなかなか続かなかったけれど、「好きな食べ物は？」「カレー！」と笑顔で答えてくれた瞬間、一気に心の距離が近づいた気がした。

その後は好きな音楽の話や、休日の過ごし方などを話してくれた。僕が話す時も一生懸命うなずいてくれて、なんだか嬉しかった。障害があるからといって、「分かり合えない」と思っていたのは、僕の思い込みだったのかもしれない。ほんの少し、勇気を出して話しかけるだけで、こんなに温かい気持ちになれるのだと実感した。そのふれあいの中で、スタッフの方が話してくれた言葉がとても印象に残っている。「障害があるからできない、ではなくて、一緒にやるにはどうすればいいかを考えることが大切なんです」と。これは、学校生活や友人関係にも言えることだと思う。何か違いがあるからといって、それを「壁」にするのではなく、その壁をどうやって無くすのか考えて努力することが、共生社会を作る第一歩なのだと思う。

僕たち高校生は、これからたくさんの人と出会っていく。その中には、国籍が違う人もいれば、文化が違う人もいるし、障害がある人もいると思う。でも、どんな人とも心が通じ合う瞬間は、必ずあると思う。大切なのは人の出会いを怖がらないことだと思う。自分とは違うことに、新しい気づきや優しさがあるのだと思う。ふれあいの後、僕はインターネットで障害者の就労支援や福祉活動について調べるようになった。そして、ボランティア活動にも少し興味を持ち始めた。何か大きなことができるわけではないけれど、まずは「知ること」「関心を持つこと」から始めようと思った。

僕たちの身の回りには、見ようとしなければ見えないことがたくさんある。でも、目を向けるだけで、そこにある世界がこんなにも広くて温かいと気づける。「出会い」は偶然かもしれない。でも、その出会いから「ふれあい」が生まれ、「心の輪」が広がっていく。それはきっと、自分の中の偏見や思い込みはなくし、誰かを思いやる優しさを持つきっかけになると思う。障害のある人となない人、という区別はせず

に、「一人の人間」として尊重する。そんな当たり前のことを、もっと多くの人が意識できるようになれば、社会はもっと優しくなれると思います。

僕はこれからは、人との出会いや、ふれあいを大切にしていき、充実した学校生活を送っていきたいです。